

具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理 ～焼けた骨の存在から見た葬法に焦点をあてて～

Reorganization of the Skeletal Remains from Shiitachi Site, Gushikawa Island
- Fired Bones and Burial Method -

片桐千亜紀・小橋川剛・島袋利恵子・土肥直美

Katagiri Chiaki, Kobashigawa Takeshi, Shimabukuro Rieko, Doi Naomi

ABSTRACT: This paper presents the result of studying skeletal remains unearthed from Shiitachi site in Gushikawa island of Izena-son, Okinawa prefecture. The site is located on a sand dune below a rock shelter that faces the ocean, and it had been used as a cemetery for a certain period of time. The site was excavated from 1977 to 1981 by the Izena-son Board of Education, with support from Okinawa Prefectural Board of Education. As a result, a number of Jomon-period skeletal remains were recovered. Most of the bones that were found did not reflect an anatomical layout; instead, the specimens were chiefly collected bones and were organized into a proper manner for purposes of study.

Based on this reorganization, the number of buried bodies was estimated to be 62. Not only dried bones (63%) but also fired ones (37%) exist in the collection. The latter consists of a "bleached-and-fired group" (bones burned after an initial burial period, 24%) and a "body-fired group" (bones burned in the process of cremation, 13%). Therefore, this site includes a certain proportion of cremated bodies.

This site shows an early stage of aerial sepulture practice that is commonly known in Okinawa, and is considerably important for clarifying the prehistoric culture of Okinawa. Further examination and evaluation of the site is required.

1. はじめに

南西諸島における先史時代の葬墓制研究については、1981年に嵩元政秀氏・當間嗣一氏によって集成された「考古学上よりみたる南島の葬制について」（嵩元・當間 1981）があり、南西諸島においても葬墓制は多種多様にわたることが指摘されている。その数年後、沖縄県地域史協議会によるシンポジウム（沖縄県地域史協議会 1989）が行われるなど、1980年代は活発な葬墓制研究が展開されている。近年では新里貴之氏が1980年代以降の資料を追加しつつ集成を行い、整理している（新里 2004）。しかし、このように研究が進展する中でも後述する「焼けた骨」についてはあまり注目されていないのが現状と思われる。

本稿は伊是名村具志川島岩立遺跡の発掘調査（伊是名村 1977・78・79・81）で検出された人骨群の再整理を行ったものである。この調査は1976年～1980年まで伊是名村教育委員会が主体となって実施された。そもそもこの再整理は、土肥が主体となって2004年～2006年の3ヶ年間にわたり実施した、うるま市具志川グスク崖下地区の学術調査の成果が契機となった。その成果は今後まとめる予定であるが、この遺跡からは焼けた人骨が層をなして多量に確認された（沖縄タイムス・琉球新報

2006.11.14 朝刊参照)。このことから、南西諸島の先史時代には死者を「火」で焼いて葬送する「習慣」もあった可能性が考えられ、これまでに確認されている焼けた人骨が検出された遺跡の人骨群を見直すこととした。

岩立遺跡は沖縄貝塚時代前期後半から中期と考えられる人骨が岩陰から多量に検出され、焼けた人骨も含むことが報告されている（伊是名村教育委員会 1977～79、81）。さらに、報告者によって「焼く行為を一連の埋葬行為・儀礼の中の一つとして、位置づけることも可能であろう」（木下・中村 1979）と指摘されていることは重要である。このことから、当該遺跡は焼けた人骨に着目しつつ再整理を実施するために必要なデータがそろっている。

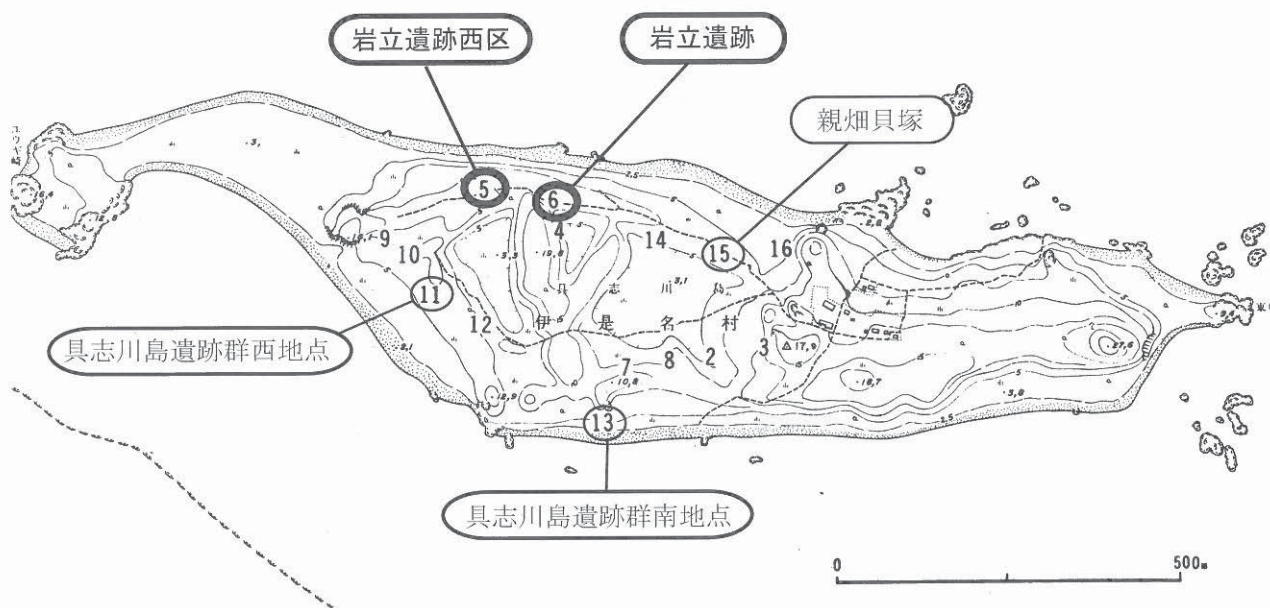
沖縄県立埋蔵文化財センターでは平成 18 年度から具志川島岩立遺跡西区の発掘調査を再開（1989 年～1992 年に西区では初めての調査が実施されている。）しており、前回の調査よりさらに下層からも人骨層が検出された（岸本・片桐 2006）。

そこで、これまでの岩立遺跡での調査成果をまとめ、集団の推定個体数と焼けた人骨との割合や、遺構としてのまとまり等を把握することを目的として、墓地として機能した時期の岩立遺跡の実態に再度迫ってみることとした。

2. 遺跡の概要

岩立遺跡は沖縄県島尻郡伊是名村具志川島に所在する砂丘遺跡で、「具志川島遺跡群」の一部として位置づけられ、村指定（1982.11.1 指定）の岩立遺跡と岩立遺跡西区に分かれている（第 1 図）。2つの遺跡は 1970 年代に大規模な採砂工事が行われて遺跡のほとんどが破壊の憂き目にあったが、もともとは一連の遺跡であったと思われる。現在は岩立遺跡も岩立遺跡西区も岩陰にわずかに残存するのみで、垂直に切り取られた遺跡断面が自然の風雨を受けながら露出し日々壊滅の危機に瀕している。

具志川島遺跡群は 1960 年代にその存在が知られて以来、2 度の発掘調査が行われており、先史時代の重要な情報を多量に有する遺跡群として認知されている。1 度目は 1976 年～78・80 年にかけて、



第 1 図 岩立遺跡の位置（伊是名村教育委員会 1977 第 3 図より転載、一部加筆）

※ 地図内の番号は 1975 年表面踏査の遺物確認地点



第2図 具志川島の位置

伊是名村教育委員会が主体となり沖縄県教育委員会の協力のもとで4次にわたって発掘調査が実施された。この調査を便宜的に具志川島遺跡群発掘調査の第1期とする。2度目は1989年～1992年にかけて4次にわたって実施された。1989年は沖縄県教育委員会が主体となって実施した「北部リゾート地区遺跡分布調査」の一環として実施され、1990年～1992年までは伊是名村教育委員会が主体となって実施された。この調査を便宜的に具志川島遺跡群発掘調査の第2期とする。現在、2006年より沖縄県立埋蔵文化財センターが第3期目の発掘調査を実施している。

2度にわたる具志川島遺跡群発掘調査の結果、岩立遺跡では高宮暫定編年前Ⅳ期～Ⅴ期と考えられる多量の人骨を含む層や、前Ⅲ期と考えられる面縄前庭式系統の土器群が、炉跡等の生活址を示す遺構と伴に確認されており、沖縄県の先史時代を考える上で重要な成果が得られている。

3. 遺跡の調査研究略史

岩立遺跡発掘調査の研究史について人骨検出層の状況に焦点をあてて述べる。

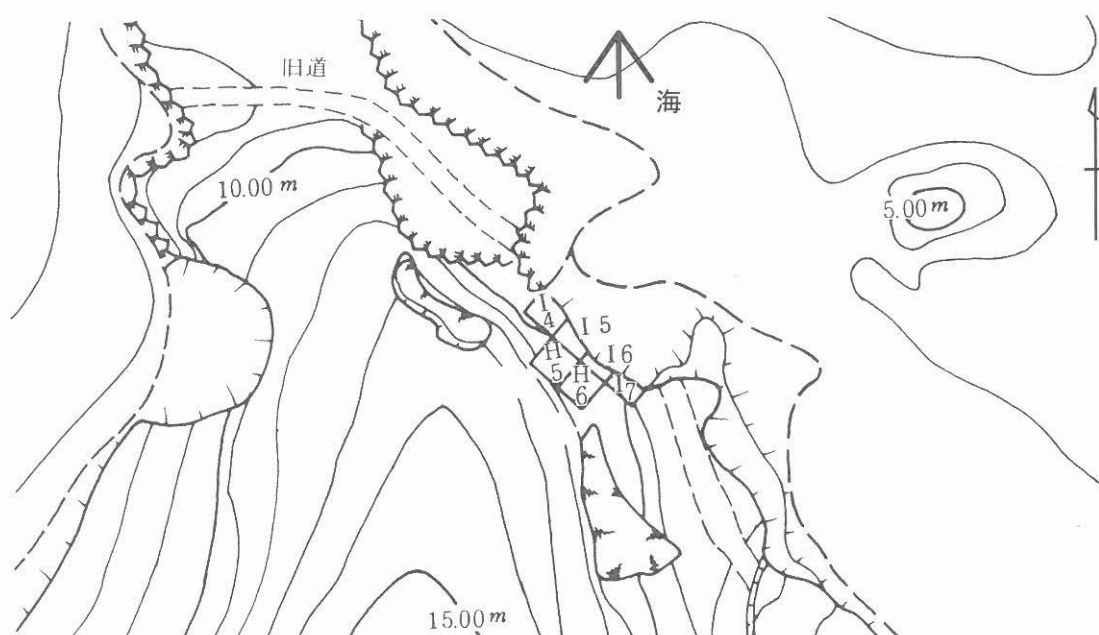
3-1 具志川島遺跡群の発見

伊是名村本島の遺跡が紹介されたのは戦後になってからである。多和田真淳氏・新田重清氏・嵩元政秀氏によって伊是名村の遺跡調査が行われ、4遺跡が紹介されている（多和田1960）。具志川島に遺跡が存在することは高宮廣衛氏によって紹介された親畑貝塚（高宮1966）が初めてと思われる。その後、1970年代になり前述した採砂工事が行われたことも契機となり、1975年に実施された沖縄県教育委員会による遺跡分布調査の結果、具志川島の様々な場所で遺物散布地や遺物包含層を確認し（第1図）、「具志川島遺跡群」として島の重要性が認識され、岩立遺跡の存在も明らかとなった（この時点では具志川島遺跡群として存在が知られていだけで、「岩立遺跡」は命名されていない）。

以下、人骨層の調査経過に焦点をあて概略する。

3-2 第1期調査

1977年～1980年の4次にわたって実施された。第1次調査（1976年）では具志川島中央に600



第3図 岩立遺跡発掘調査（第1期）グリッド設定状況

（伊是名村教育委員会1980第5図より転載、一部加筆）

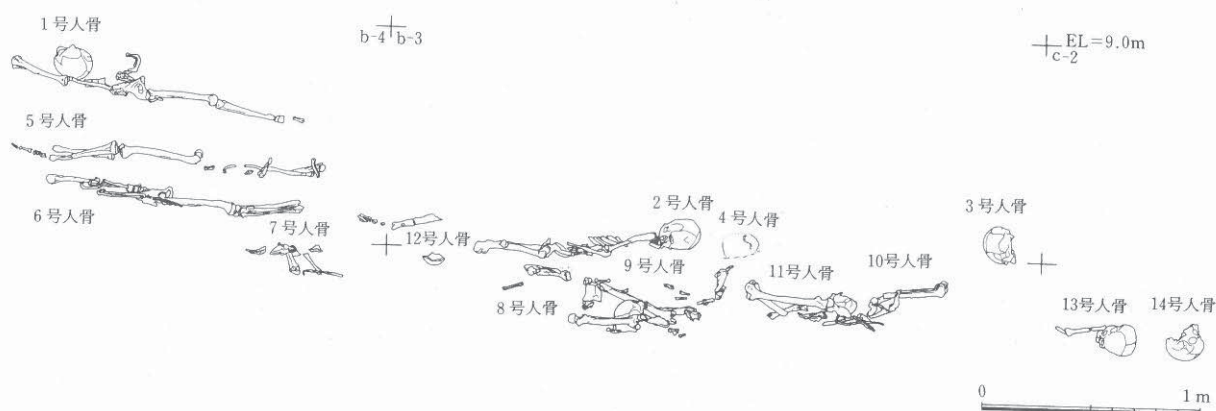
m四方の巨大なグリッドを設定し、第6地点ルⅥ中地区Ⅰ-6・7（具志川島遺跡群東地点、後の岩立遺跡）と第11地点へⅢ中地区C・D-4・5（具志川島岩立遺跡西地点）の発掘調査が実施された。この調査によって第6地点ルⅥ中地区（岩立遺跡）Ⅰ-6グリッドのⅥ層より人骨が検出された。第2次調査（1977年）では調査区を第6地点ルⅥ中地区（岩立遺跡）H-6からH-4グリッドまで拡張し、同じくⅥ層から多量の人骨が豊富な貝製品と伴に検出された。この調査で焼けた人骨が一定のまとまりを持って検出されている。第3次調査（1978年）ではいよいよ遺跡名が付けられた。第6地点ルⅥ中地区北側の海岸にある「岩立」と呼ばれるキノコ状の石灰岩塊から「岩立地区」としたという。H-6からH-4グリッドまで調査が行われ、二次調査と同様多量の人骨が焼けた人骨と伴に検出された。人骨群は解剖学的に正位置を保つものがほとんどなく、ある程度整った集骨の状態である。この調査ではいくつかの重要な点が確認され指摘されている。「1号人骨」という丁寧に再葬された人骨が確認されたこと、県内初の貝輪着装人骨が検出されたこと、焼けた人骨と伴に副葬品も焼けていること等は重要な成果であったと思われる。なお、「貝輪着装人骨」は遺構切取が行われ、現在は伊是名村のふるさと民俗資料館に展示されている。最終年度の4次調査（1980年）では、1号人骨よりもさらに下から「2号人骨」が他の人骨群と伴に検出された。「2号人骨」は1号人骨やその他の人骨群と異なり、解剖学的に正位置に近い状況で確認されている。この調査で人骨層はH-6グリッドという一部の場所において上層（1号人骨検出レベル）と下層（2号人骨検出レベル）に分層でき、墓地の形成時期を大きく区分できることがわかった。また、上層と下層では人骨や副葬品等の状況が大きく異なることも指摘されている。

以上が、第1期における人骨層（Ⅵ層）の調査状況である。

3-3 第2期調査

第1期調査から10年の時を経た1989年、再び具志川島遺跡群の発掘調査が開始された。この調査では沖縄県教育委員会だけでなく、沖縄国際大学・鹿児島大学が全面的に協力し、学生を作業員として発掘調査が行われた。調査は1989年～1992年まで4次にわたって実施された。岩立遺跡（鹿大班）の他、岩立遺跡西区（沖国班）、具志川島遺跡群西地点・南地点（沖国班）、親畑貝塚（鹿大班）の発掘調査が実施された。

岩立遺跡の発掘調査は鹿児島大学班が行った。第1期に実施された調査区とその周辺を含んでA・Y・Z（第1期調査区）のグリッドが設定された。第1期調査区の北西に位置するAグリッド1区では掘



第4図 岩立遺跡西区人骨検出状況見通し

（伊是名村教育委員会 1993 第7図より転載）

削前から人骨が露出していたという。発掘調査の結果、92-1～3号と名付けられた人骨の他、多数の散乱骨が検出された。特に、92-2号人骨は貝輪を着装しており、第1期第3次（1979年）で検出された貝輪着装人骨を彷彿とさせる。しかし、時期がおさえられる遺物が出土しなかったため両者の時期的関係については言及できないとされる。Aグリッド2～5区のV・VI層は仲泊式土器や面縄前庭式土器が出土し、後者は下層に集中する傾向があるという。また、V層で人骨群が検出されており注目されるが、少量で詳細な状況等は把握できなかったようである。

第2期の調査で最も注目されることは「岩立遺跡西区」の発掘調査を初めて行い、解剖学的に正位置を保つ人骨が数体確認されたことである。人骨については4次にわたる発掘調査の内、1989年分と1990年分が報告されており、2年間で第3・4層から約14体分の人骨が確認された。この内、1・2・5・6号は解剖学的に正位置を保つ一次葬の人骨で、10・11・13・14号は集骨状態で確認され、二次葬と考えられている。人骨群は平面的に検出されるだけでなく、層位的な厚みをもって確認されている。上部では一次葬が、下部にいくにしたがって散乱状態（集骨）が著しくなるという（沖縄国際大学考古学研究室 1993 a）。検出状況で特に注目できることは、一次葬の1・5・6号人骨がそれぞれ間層を挟んでほぼ同じ場所に安置されていることである。このことは当該遺跡の葬制を考える上で重要であり、何らかの理由により一次葬で完結する場合（単葬）と二次葬（再葬）まで行なう場合が同時期にあったのか、二次葬から一次葬への変化であったのか検討が必要である。

この他、第2期の調査では具志川島遺跡群西地点（第1期調査第1～2次調査でも実施）からも岩陰部の清掃中に幼児骨が2体検出された（沖縄国際大学考古学研究室 1993 b）とされるが、詳細は不明である。西地点は第1期調査と第2期調査の成果によれば、沖縄貝塚時代後期の範疇に収まると考えられているが、良好な資料が出土しなかったため残念ながら幼児骨との関係は不明である。

以上が、第2期における人骨層の調査状況である。

3-4 調査成果（人骨層）のまとめ

第1期から第2期における人骨層の調査成果をまとめる。まとまった人骨は岩立遺跡（VI層）・岩立遺跡西区（第3・4層）・具志川島遺跡群西地点（層不明）で確認されている。

岩立遺跡出土人骨は解剖学的に正位置を保たないが、ある程度整った状態で集骨されたものが主体的に確認される。しかし、貝輪が着装された状態で確認された人骨（腕のみ）や「1号人骨」と呼ばれる丁寧に再葬されたと考えられる人骨、さらにその下部から解剖学的にほぼ正位置を保つと考えられる「2号人骨」が確認されており、本遺跡の葬法が一様ではないことがわかる。人骨の状態についても、焼けてない状態のもの、焼けた状態のものが一定量確認されており、習慣的に「火」を利用して葬送儀礼を実施していた可能性も指摘されている。一部のグリッド（H-6）では墓地の形成時期を区分できることがわかり、上部と下部では人骨や副葬品等の状況が大きく異なることが指摘されている。

岩立遺跡西区では解剖学的に正位置を保つ人骨が多数確認された。しかし、すべて解剖学的に正位置を保つわけではなく、上部が主体となっており、下部にいくにしたがって集骨状態で確認された。人骨の状態については、焼けたものについて言及されていないことから、目立つほど確認されていないと思われる。

4. 岩立遺跡人骨層（VI層）の状況

今回再整理した岩立遺跡（第1期具志川遺跡群発掘調査）で検出された人骨層について概観する。第1期の岩立遺跡においては19枚の層が確認されているが、本稿で検討する人骨が多量に出土した層

はⅥ層である。Ⅵ層は上、中、下の3層に細分されている。上層は赤褐色混礫砂層で礫を多く含み遺物をほとんど含まない。中層は黄褐色混礫砂層で人骨などの遺物を含む。下層は暗褐色混土砂層で多量の人骨や貝製品を含む。Ⅵ層下の厚さは20cmを超える。

人骨はH-5グリッド南側からH-6グリッドにかけて多く確認されている。人骨の多くは個体としてのまとまりについて言及することが困難な集骨状況で検出されるが、四肢骨等が同一方位に並べられた状態で確認されており、ある程度の秩序をもっていたことがわかる。また、岩陰の外を中心にビーチロックが確認されていることから、墓域として区画する等の遺構が存在していたことが指摘されている。焼けてない状態の人骨と焼けた状態の人骨が確認されており、焼けた人骨は西側壁に沿って出土する傾向があるとされる。焼けた人骨の周辺には場所により石灰岩や周りの貝が火を受けている部分もある。

その他、丁寧に再葬されたと考えられる「1号人骨」や貝輪着装人骨など特徴的な葬法が確認されている。「1号人骨」の周辺のビーチロックで囲まれた範囲内では「1号人骨」の頭位の方向とほぼ同じ北、北西-南、南東をとる四肢骨が焼けてない状態の人骨、焼けた状態の人骨を問わず多く出土していることも注目する点である。また、1号人骨のさらに下から解剖学的に正位置に近い状態で「2号人骨」が確認されており、副葬品を持たない点等で1号人骨の時期とは葬法を異にするとされる。

以上のように、本遺跡からはⅥ層・下層の中でも層位的な上下関係や平面的な分布でさまざまな葬法が確認できる。

Ⅵ層は下層のⅦ層から口縁肥厚部に細沈線文を有する土器（嘉徳Ⅱ式土器）が出土し、上層のⅤ層から口縁形態が天久A式土器に属するものを含む肥厚口縁土器が出土する。このことからⅥ層の時期は沖縄貝塚時代前期後半（暫定編年前Ⅳ期）から沖縄貝塚時代中期（暫定編年前Ⅴ期）の間として捉えられている。

5. 人骨調査

再整理した人骨群の様相について述べる。今回は集団の推定個体数と焼けた人骨との割合や遺構としてのまとまり等を把握することを目的として、人骨の観察や出土状況図への再還元を行った。今回は岩立遺跡出土人骨のなかでも、第1期に調査された資料のみであり、第2期に実施された資料は含まれていない。

5-1 人骨の状態

岩立遺跡で確認された人骨は焼けた状態のものと焼けていない状態のものがある。また焼けた状態のものは、骨が著しく変形・縮小し、細かいひび割れができて小片化している一群と、ほとんど変形はしておらず、大きく割れている一群に大きく分類される。色調も前者は灰白色を呈するが、後者は黒色・黒褐色を呈する。時代を問わず葬法を考える上では、この骨の状態が重要な要素ともなる。岩立遺跡出土人骨で問題となるのは、被葬者が死後間もなく、まだ皮膚や筋肉等の軟部組織が残った状態で焼かれたのか、またはこれらの組織が分解消失し、白骨化した状態で焼かれたのかであり、本稿の根幹となっている。

このように焼けた人骨の状態については、池田次郎氏（池田 1981）や馬場悠男氏ら（馬場他 1986）の論功があるため、参考として引用する。

池田次郎氏は焼けた人骨の状態について「軟部組織に包まれている長骨が焼けた場合、それは外面の深い干割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、さらにはいちじるしい捩れなどの変化で特徴づけられるが、白骨を焼いた時の主な変化は、長軸方向の裂開と、表面の浅い干割れだけにとどまり、

形が歪むことはない (Buikstra1973)。また、長骨表面における緻密質の溶解は、軟部組織に包まれている骨が焼けた場合にのみ起る現象だとされている。」とまとめている。さらに、焼けた人骨の色調について、「Baby (1954) は、焼骨を完全焼骨と不完全焼骨とに分け、前者は銀ねず色ないし青味灰色の色彩と、骨の表面に生ずる深い亀裂や、骨の捩れを特徴とするが、後者の場合には、骨の表面が黒く焦げるだけで顕著な変形はみられないと述べている。Herrmann (1977) は、この完全焼骨と不完全焼骨の臨界温度を 700 ～ 800℃ とし、(略)。」とまとめている (池田 1981)。

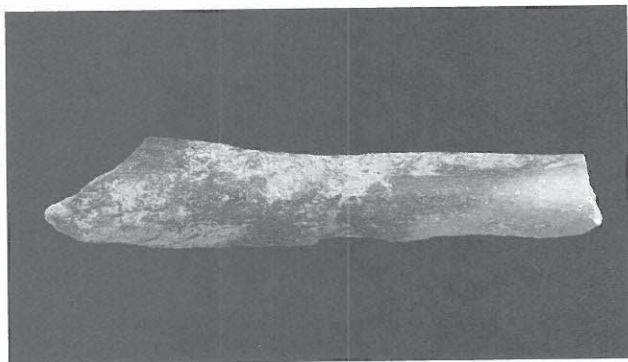
以上のことを考えると岩立遺跡出土の焼けた人骨には、被葬者の死後間もなく、皮膚や筋肉等の軟部組織が残った状態で火を受けた一群と、遺体が腐食し白骨化した状態の骨が再び火を受けた一群とが存在すると考えられる。このような人骨の状態に関しては明確な単語がないため、本稿においては以下のように用語を定義しておく。

【岩立遺跡出土人骨の状態】

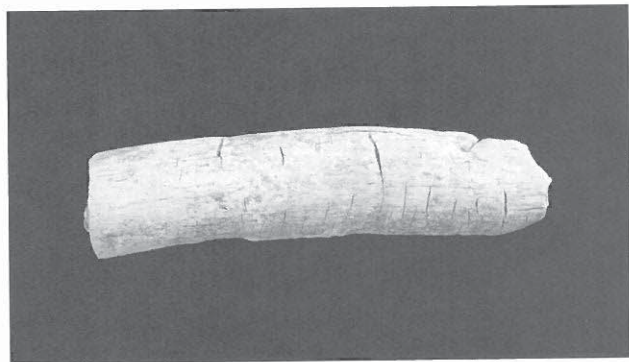
乾燥骨・・・ 遺体が腐食し白骨化した状態の人骨。

焼 骨・・・ 遺体が腐食し、白骨化した人骨そのものが焼かれたと考えられるもの。ひび割れができて大きく割れている。骨の表面が黒色や黒褐色を呈することから、池田氏の言う不完全焼骨であり、燃焼温度は低かったと考えられる。乾燥骨より硬質化している。本遺跡では全体的に火熱を受けているものや、部分的に火熱を受けているものが見られる。

火葬骨・・・ 皮膚や筋肉などの軟部組織が残った状態で焼かれたと考えられるもの。軟部組織が残った状態で火熱を受けたため、骨が著しく変形・縮小している。また、横方向の細かいひび割れが多数見られ、細片と化しているものが多い。骨が灰白色を呈することから、池田氏の言う完全焼骨であり、燃焼温度は高かったと考えられる。骨が縮小・変形しているため、大きさや細かい形状等の情報は失われる。男女の判断が困難である。



図版 1 焼骨の例



図版 2 火葬骨の例

5-2 調査方法

人骨調査の方法として、まず、当センターに収蔵保管されている第 1 期具志川島遺跡群発掘調査 (岩立遺跡) で出土した人骨の観察を行った。人骨は遺跡名・調査年度・グリッド・層序・ドットナンバーがユニパックに丁寧に記載された状態で保管されている。一覧表を作成し、ユニパックひとつひとつ

の人骨を観察しつつ、人骨の部位、残存状況、骨の状態（乾燥骨、焼骨、火葬骨）を記録する。同時に、頭骨・下顎骨・四肢骨等を中心に残存部分を図化し推定個体数を割り出す根拠とした。一覧表と図化作業の終了後、その基礎データを基に人間の体にひとつしかない部分の数を計上して推定個体数を求めた（第1表）。

次に、分類した人骨の状態を図面に還元する作業を行った。これは、人骨のドットナンバーをもとに原図を当たり、さらに報告書で図化された位置に還元していくもので、これによって、人骨の状態別（乾燥骨・焼骨・火葬骨）の分布状況を調べた。

人骨鑑定の際に用いた年齢区分は Knussman (1988) を参考に、未成人を乳児（出生～1歳）、幼児（1歳～約6歳）、小児（約6歳～約14歳）、若年（約14歳～約20歳）とし、成人を成年（約20歳～約40歳）、熟年（約40歳～約60歳）、老年（約60歳以上）としてまとめた。

5-3 集団の様相

第1期具志川島遺跡群発掘調査の岩立遺跡における人骨層（Ⅵ層）の推定個体数を求めた結果は第1表のとおりである。推定62体が確認されたが、焼骨や火葬骨には細片と化して同定できないものが多数あったため、実際はさらに多いものと考えられる。性別と年齢で見ると、成人が61%（内、男性27%、女性19%、性別不明15%）、未成人が39%、となっており（第6図）、本遺跡の墓地が老若男女分け隔てない共同墓地であったことがわかる。未成人の割合が高いのも先史時代の特徴であろう。

ここで注目したいことは、焼けた人骨が37%の割合で確認されたことである（第5図）。さらに詳細にみると、死後間もなく軟部組織が残った状態で焼かれたと考えられる火葬骨が13%、白骨化した状態で焼かれたと考えられる焼骨が24%確認された（第5図）。乾燥骨・焼骨・火葬骨のそれぞれにおける性別や年齢の割合には大きな差異が認められない（第7～9図）。このことから、火で焼かれた被葬者と焼かれなかった被葬者間には、性差や年齢の区別がなかったことがわかり、葬法の違いには別の理由があったことが考えられる。

焼けた人骨の割合が他の遺跡と比較して高いのか低いのかについては、他の遺跡をより詳細に整理してみないと判断ができないため今後の調査に委ねるが、このように数字で整理できたことに一定の成果があったものとする。

5-4 人骨の状態別分布状況

人骨層（Ⅵ層）については、第1期の第3次（伊是名村教育委員会 1979）・第4次（伊是名村教育委員会 1981）に詳細図が掲載されており、これを一部加筆しつつ利用した。具体的には、第3次発掘調査報告において第1・2次の調査成果を1つの図面にまとめたもの（伊是名村教育委員会 1979 第6図）と第3次の成果を3つの図面にまとめたもの（伊是名村教育委員会 1979 第7～9図）を利用し、さらに第4次の成果を1つの図面にまとめたもの（伊是名村教育委員会 1981 第35図）を利用した。それぞれ、レベルが高い順番に図化されているため、これらの図面を便宜的に第1検出面から第5検出面と呼ぶ。第10図～第14図は第1検出面から第5検出面について、人骨の状態別に色分けしたものである。

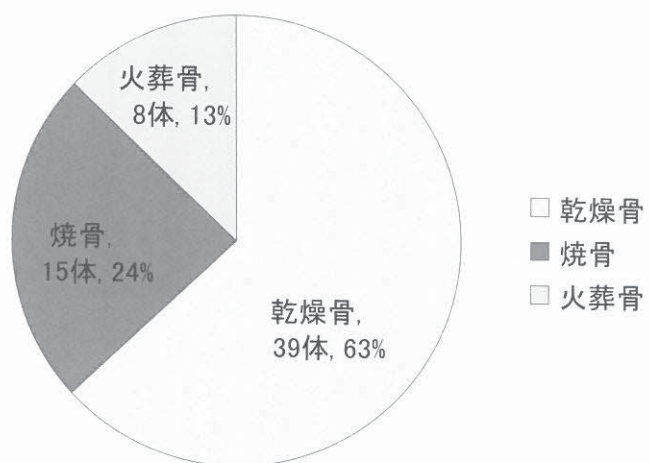
乾燥骨・焼骨・火葬骨の状態別に見た結果、大きく分けて5つのユニットを見出すことができる。また、これらは平面的に乾燥骨・焼骨・火葬骨としてまとまりを持ち、レベルの違いによっても変わっていくことがわかった。

第1検出面 ユニット1は乾燥骨群、ユニット2は火葬骨群、ユニット3・4は焼骨群が主体的に確認された。遺跡の状況からすれば、墓地が機能しなくなる直前の状況と考えられる。

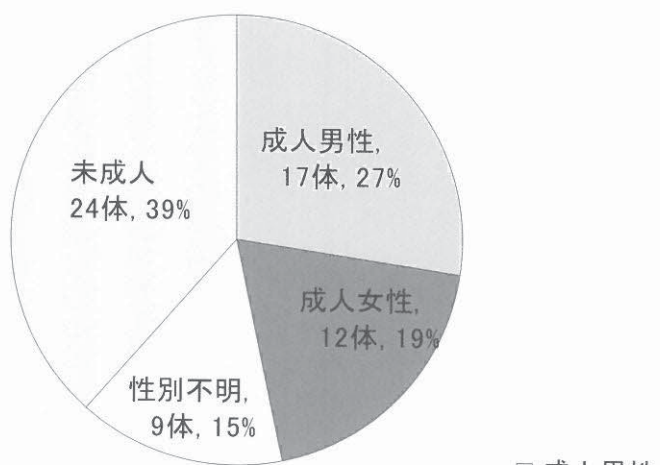
第2検出面 ユニット1は乾燥骨群、ユニット2は火葬骨群、ユニット3は焼骨群となっており、

第1表 推定個体数一覧

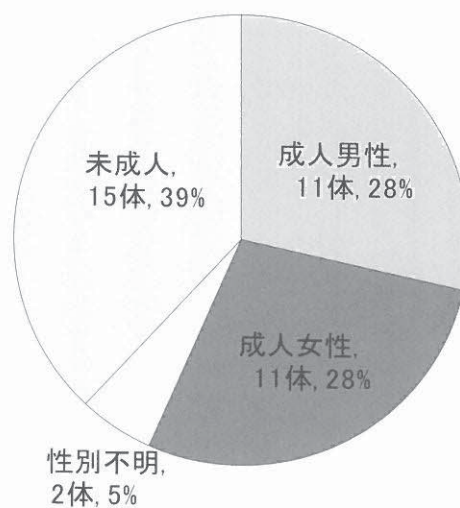
乾燥骨										焼骨										火葬骨													
部 位	成 人				未成人						成 人				未成人						成 人				未成人								
	男性	女性	性別 不明	計	若年	小児	幼児	乳児	計	男性	女性	性別 不明	計	若年	小児	幼児	乳児	計	男性	女性	性別 不明	計	若年	小児	幼児	乳児	計						
側頭骨	r	8	2	1	11		2	2	4	4	1	1	6	1				1	2		4	6					0						
	1	8	2	1	11		3	1	4	3	1	4	8	1				1			4	4			1		1						
前頭骨	r	8		2	10		3		3	1	1	4	6					0			4	4					0						
	1	8		1	9		1		1	2		3	5					0			5	5		1			1						
下顎骨	r	8	1	10	19		6	4	10	2	1	5	8	1	2	4		7			3	3					0						
	1	10	2	11	23		7	2	9			6	6	1		3		4			3	3		1			1						
上腕骨	r	11	5	8	24	1	1	2	4	2			2		1		1				2	2					0						
	1	8	4	6	18		2	2	4	3		1	4		2			2				0					0						
尺 骨	r	9	3	4	16		1	1	2	1		4	5				0				1	1					0						
	1	6		4	10		1		1	3	1		4	1			1				1	1					0						
橈 骨	r	3	2	3	8	1	1	1	3	2			2		1			1				0					0						
	1	5	2	3	10	1	1		2	1			1	1	1	1		3				0					0						
大腿骨	r	7	9	2	18	2	5	6	13				0		1			1	1		3	4					0						
	1	10	11		21	2	3	4	9	1	1	3	5	1	1			2				0					0						
脛 骨	r	11	10	3	24	1	2	5	8				3		1			1				0					0						
	1	7	8	2	17	1	3	3	7			3	3		1			1			1	1					0						
推定個体数				39										15										8									
総 計				62																													



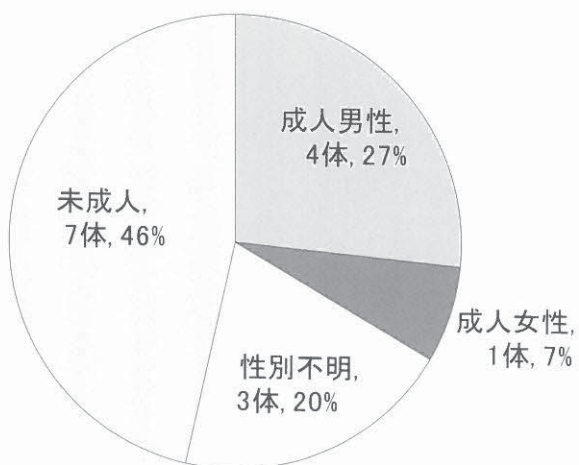
第5図 人骨状態別推定個体数



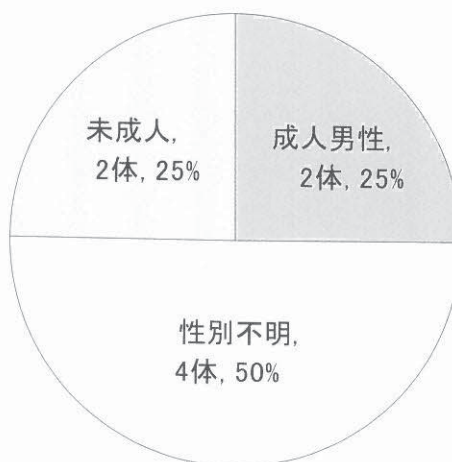
第6図 性別推定個体数



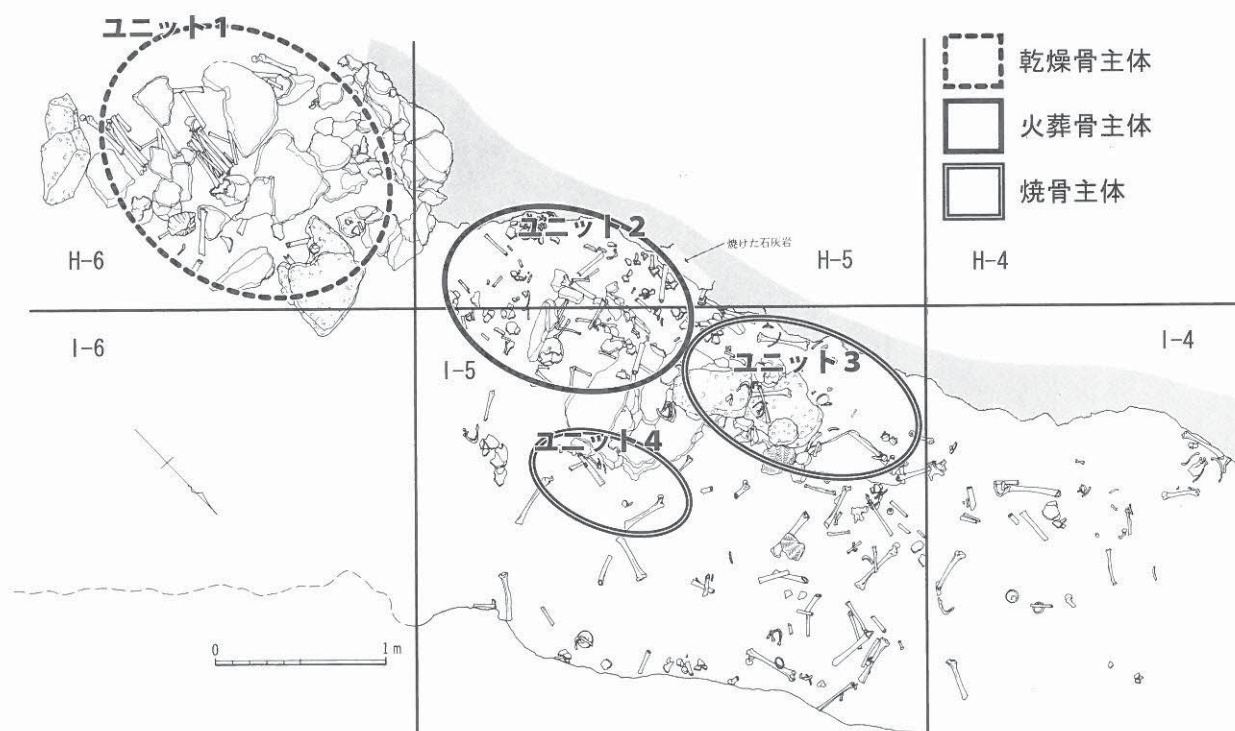
第7図 乾燥骨 性別個体数



第8図 燒骨 性別個体数

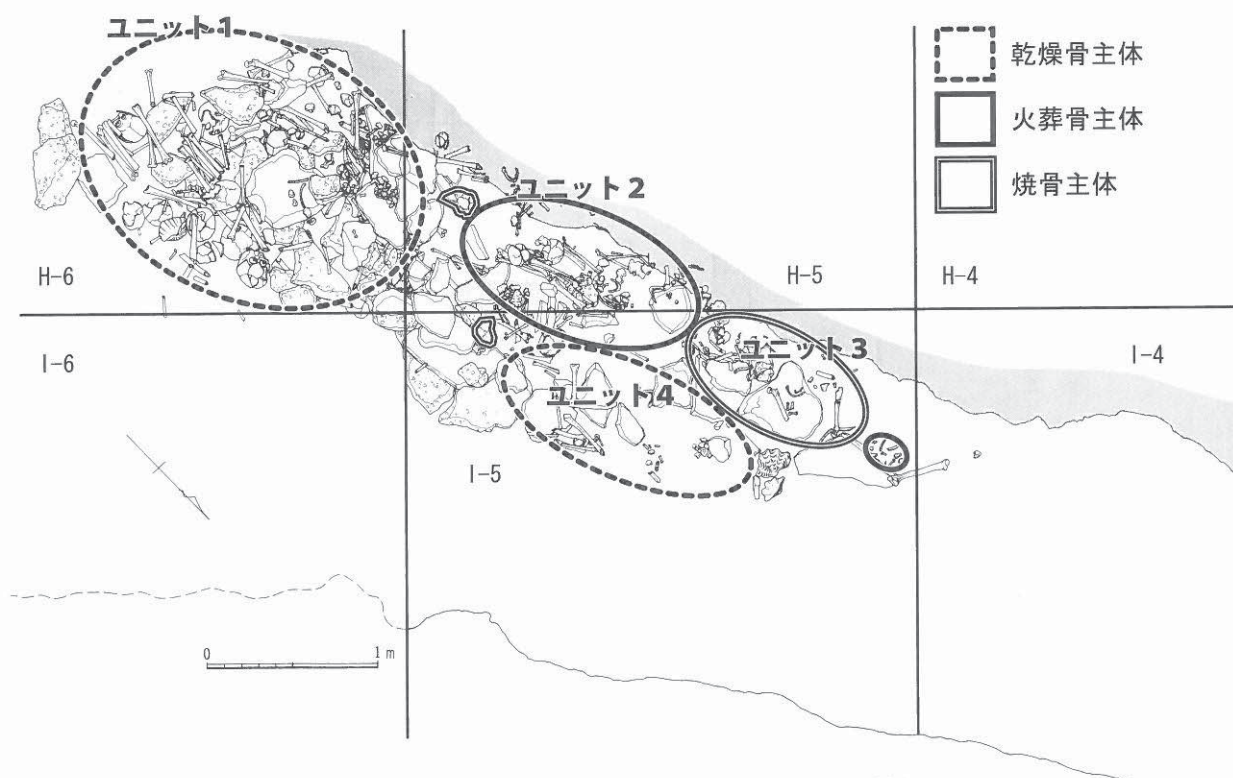


第9図 火葬骨 性別個体数



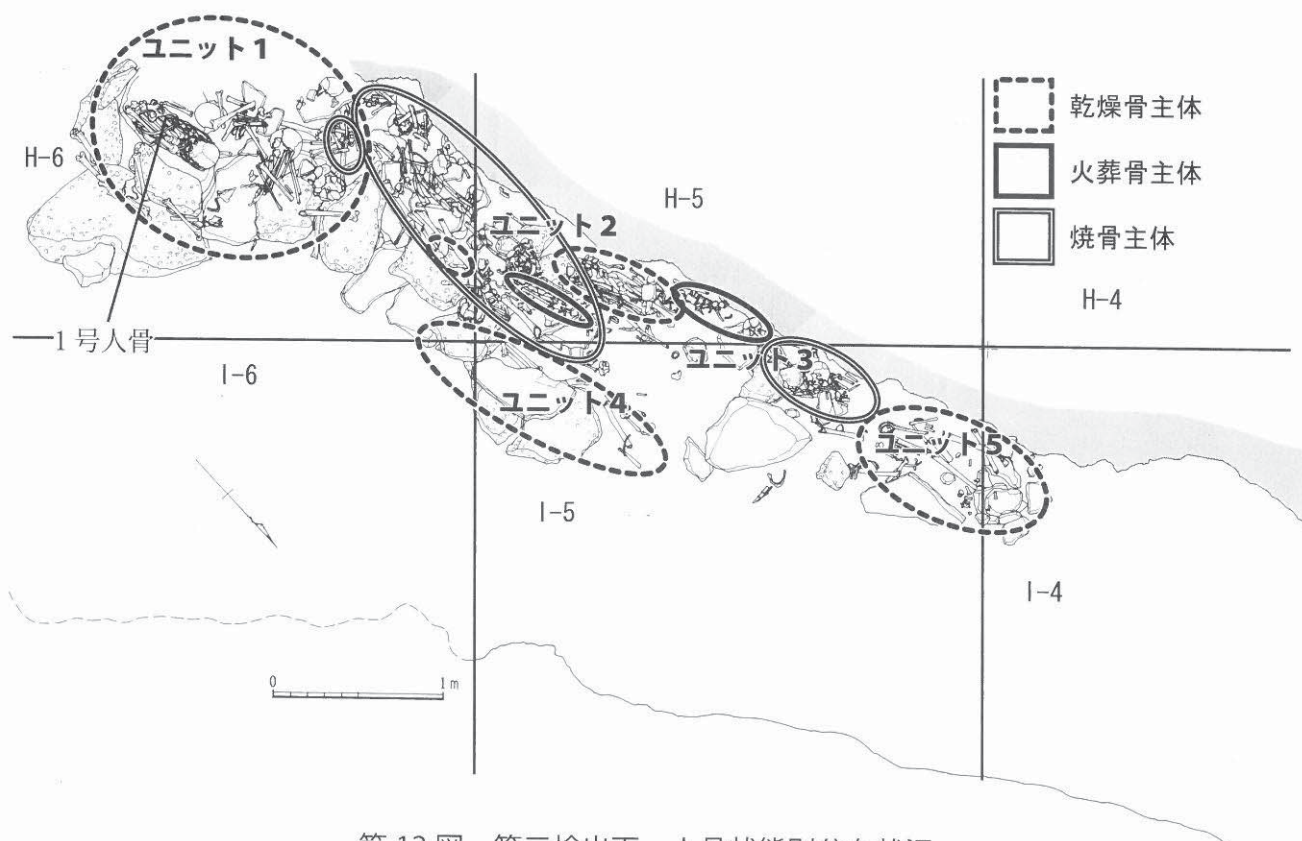
第10図 第一検出面 人骨状態別分布状況

(伊是名村教育委員会 1979 第6図より転載、一部加筆)



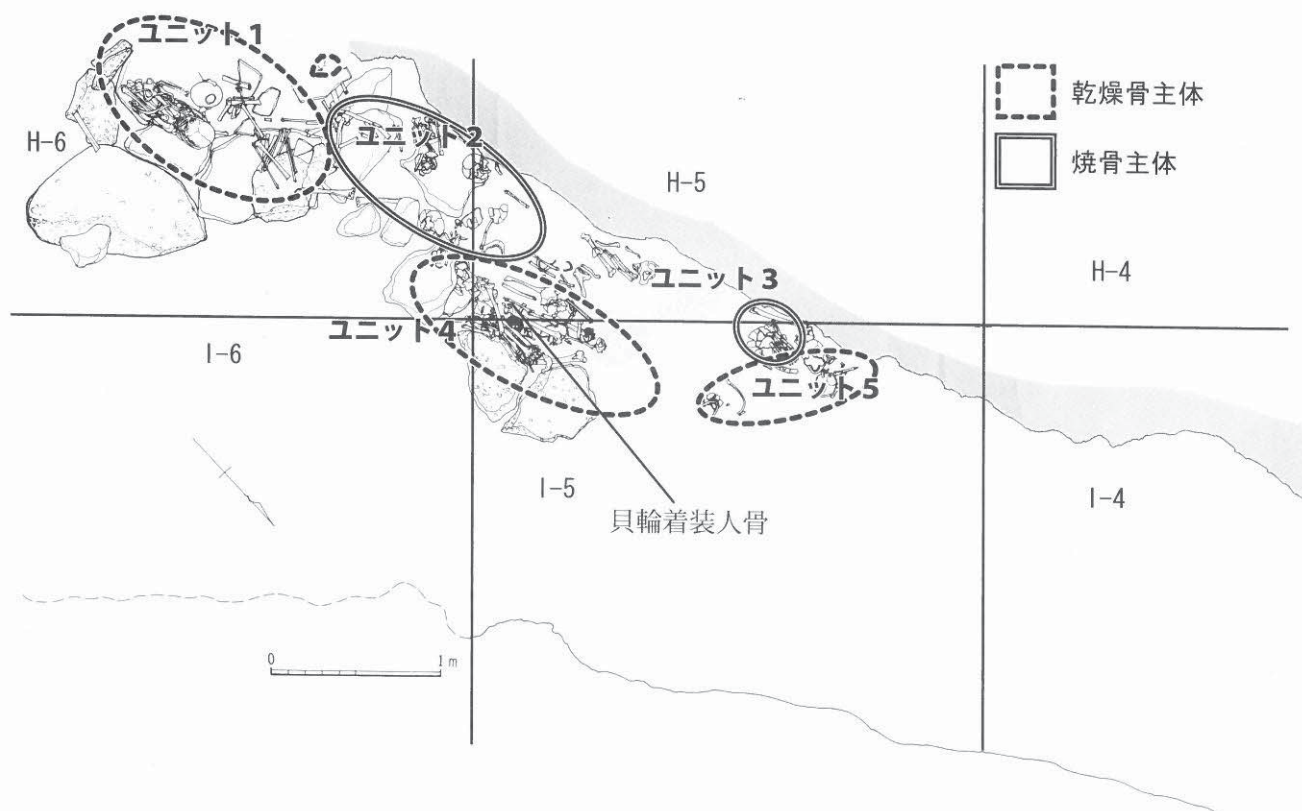
第11図 第二検出面 人骨状態別分布状況

(伊是名村教育委員会 1979 第7図より転載、一部加筆)



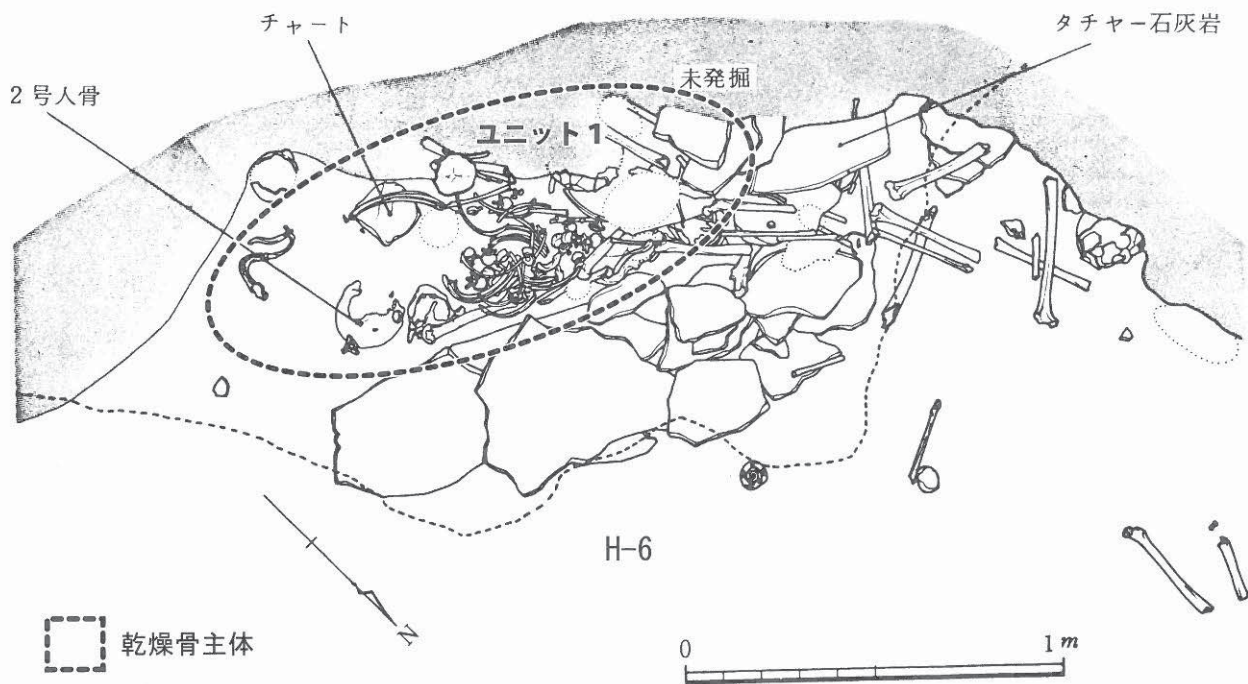
第12図 第三検出面 人骨状態別分布状況

(伊是名村教育委員会 1979 第8図より転載、一部加筆)

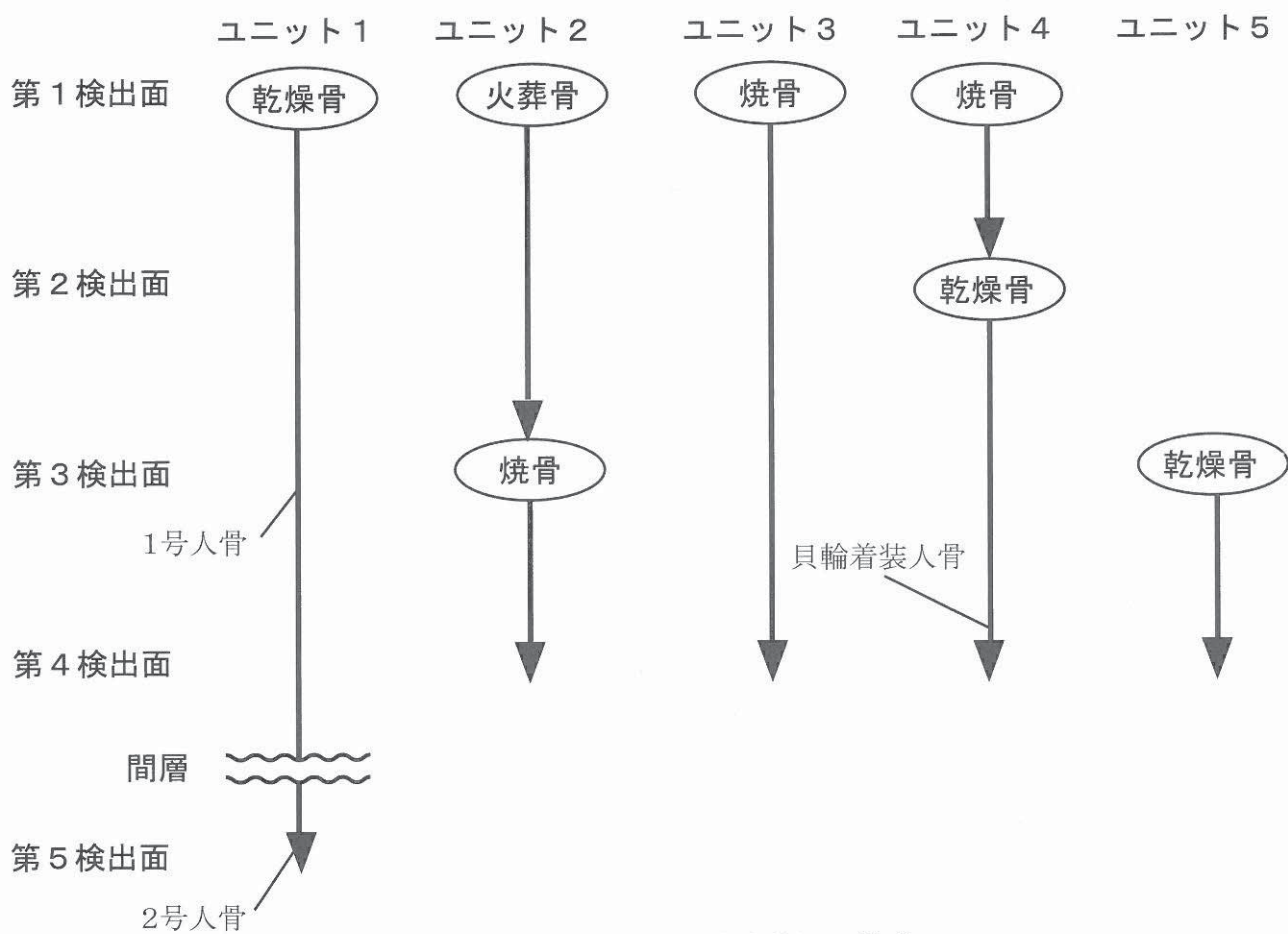


第13図 第四検出面 人骨状態別分布状況

(伊是名村教育委員会 1979 第9図より転載、一部加筆)



第14図 第五検出面 人骨状態別分布状況
(伊是名村教育委員会 1981 図35 より転載、一部加筆)



第15図 人骨状態別出土状況の模式

第1検出面と同様の状況であるが、ユニット4は焼骨群から乾燥骨群に変化している。これが1つめの変化である。

第3検出面 ユニット1は乾燥骨群、ユニット3は焼骨群、ユニット4は乾燥骨群でこれは第2検出面と同様の状況であるが、ユニット2が火葬骨群から焼骨群へと変化している。これが2つめの変化である。さらに、ユニット3が2つに分割されユニット5が新しく形成され、乾燥骨群となっている。これが3つめの変更である。また、ユニット2とユニット3の間に乾燥骨と火葬骨の小ユニットが形成されている。ユニット1の乾燥骨群には丁寧に再葬されたと考えられる「1号人骨」が検出された。

第4検出面 第3検出面と同様、ユニット1が乾燥骨群、ユニット2・3が焼骨群、ユニット4・5が乾燥骨群となっており、変化はない。沖縄県で初めて確認されたという貝輪着装人骨はこの面のユニット4で検出されている。この貝輪着装人骨は1体分確認された訳ではなく、着装部の腕のみが解剖学的に正位置を保った状態で検出された。

第5検出面 ユニット1に相当し、乾燥骨群となっている。解剖学的に正位置をほぼ保っており、単葬と考えられる「2号人骨」が検出された。ただし、同レベルから他の個体と考えられる集骨状態の人骨も検出されている。また、再整理によってH-5グリッドから一定量の火葬骨群が検出されていることがわかった。

次に、ユニット別にその推移と特徴を見てみる。

ユニット1 岩陰がほぼ南北を軸にして形成されていると考え、岩陰の南端であるユニット1は墓地が形成されてからその機能を終えるまで一貫して乾燥骨を安置する場所として意識されていたと考えられる。最下部では解剖学的な正位置をほぼ保つことから単葬と考えられる「2号人骨」が確認されている（第5検出面）。また、上部では丁寧に再葬されたと考えられる「1号人骨」（第3検出面）や解剖学的に正位置を保たないが、ある程度のまとまりをもっていることから、再葬されたと考えられる人骨群（第1検出面から第4検出面）が確認されている。このことから、葬法に変化やバリエーションがあったことがわかる。

第1検出面から第5検出面まで一貫していることは、解剖学的に正位置を保たないが、ある程度整った状態で再葬されたと考えられる人骨群が主体的に存在することである。

ユニット2 ユニット1のすぐ北側に位置する。上部では火葬骨群が形成されている（第1・2検出面）が、下部に向かうにつれて焼骨群（第3・4検出面）に変化しており、位置も南側にやや移動する。

ユニット3 ユニット2のすぐ北側に位置する。墓地が形成されてからその機能を終えるまで、一貫して焼骨群が形成されている。第3検出面において、その北側に新しくユニット5が形成される。

ユニット4 ユニット2・3の東側に位置する。最上部では焼骨群が形成されている（第1検出面）が、第2検出面からは乾燥骨群に変化しており、位置も南側にやや移動する（第2～4検出面）。第4検出面では貝輪着装人骨が確認された。

ユニット5 ユニット3の北側に位置し、調査における人骨群の北端となっている。第3検出面から形成されており、乾燥骨群となっている。

以上のことから、ユニット1・5とユニット3にはそれぞれ、乾燥骨群と焼骨群を安置する一貫した場所の意識があったことが伺え、ユニット2・4は何らかの理由により火葬骨群を安置する場所となっていたり、焼骨群や乾燥骨群を安置する場所となっていたりと変化している。図を一見すると火葬骨群が墓地形成では後半から出現する新しい葬法のように見受けられるが、第5検出面でも一定量

の火葬骨群が確認されているため、墓地形成の初期段階からなんらかの理由により火葬の方法を取っていたと考えられる。

6. まとめ

岩立遺跡が墓地となっていたと考えられるVI層の状況を再整理した。岩立遺跡VI層は岩陰を利用した墓地であり、ビーチロックの配置等により区画を作っていたことが指摘されている。遺跡は採砂工事によって破壊されているが、墓地として機能していた遺構そのもの（少なくとも被葬者の最終的な安置場所）はそれほど破壊を受けていないと考えられる。

本遺跡から焼けた人骨が多数出土したことは周知であったが、これらの資料が皮膚や筋肉と言った軟部組織が残った状態（遺体）で焼かれたと考えられる一群と、遺体が腐敗し白骨化した状態で焼かれたと考えられる一群に分類できることがわかったことは、今後人骨資料を再整理する上で重要な成果であった。

このような人骨を乾燥骨、焼骨、火葬骨に分類して推定個体数と年齢を求めた結果 62 体の被葬者が想定され、老若男女分け隔てない共同墓地であることがわかった。乾燥骨が全体の 63%（39 体）を占めるものの、焼骨 24%（15 体）、火葬骨 13%（8 体）と言った異なる葬法で安置された被葬者の数量を推定できたことも、本遺跡を評価する上で今後重要となる。

また、人骨を乾燥骨、焼骨、火葬骨に分類した結果、検出面ではいくつかのユニットを持つことがわかり、それぞれの葬法によって異なる場所に安置する意識があったことが想定できた。これには、墓地の形成期から終焉まで一貫して決められていた場所もあれば、焼骨から火葬骨へと変化していく場所もある。

人骨の検出状況については、解剖学的に正位置を保たず、ある程度整えて集骨された状態が主体を占める。これらの人骨は再葬された一群として捉えたい。さらに人骨の状態別分類によって、様々な葬法があることがわかった。

最も多い葬法は乾燥骨の一群である。一次葬後ユニット 1 やユニット 4 にまとめられ、再葬されたと考えられ、全体の 63% を占める。この中には、丁寧に再葬された「1 号人骨」が含まれる。ユニット 1 は遺跡の形成期から終焉まで一貫して乾燥骨の安置場所であり、ユニット 4 は第 4 検出面から第 2 検出面までがそれにあたる。

次に、一次葬後、遺体が腐食し白骨化した状態の人骨を再び火で焼いて再葬したと考えられる一群があり、全体の約 24% を占める。焼いた場所は特定できないが、人骨を徹底的に焼くのではなく、焼け方にかかなりのムラがある。例えば、1 本の四肢骨でも強く焼けた場所と殆ど焼けていない場所が顕著に見いだせる。このことは、遺体を焼いて粉々に破壊する意識というよりも「焼く」行為そのものに葬送の意味があったと思われる。遺体を安置して白骨化した後、さらに火で焼くという行為は当然時間と手間がよりかかる葬法と考えられる。ユニット 2・3 が最終的な安置場所となっている。ユニット 3 では墓地の形成期から終焉まで一貫してこの行為の安置場所となっており、ユニット 2 は第 3・4 検出面がそれにあたる。ユニット 2 はその後、火葬骨の安置場所（第 1 検出面）となる。

最後に、皮膚や筋肉といった軟部組織が付着した状態で焼かれたと考えられる一群があり、全体の 13% を占める。これは、死後まもない遺体が腐敗して白骨化する前に焼かれたと考えられ、火葬に類する葬法と言える。ユニット 2 の上部（第 1・2 検出面）及び第 5 検出面でまとまって確認されており、最終的な安置場所となっている。軟部組織が付着した状態の遺体そのものを「焼く」には、高い温度を持続させる技術が必要と考えられ、わずかながらこの葬法が認められたことは縄文時代の火の利用

技術を考える上でも注目すべきことである。

本人骨資料のように骨が著しく変形・縮小し、細かい亀裂が多数入り、灰白色を呈するまで焼くためには700～800℃の火力が必要とされる（池田1981）。この焼く行為の後にはそれなりの遺構が成立すると考えられるが、残念ながら確認されていない。具志川島岩立遺跡群のどこか、恐らく採砂工事によって破壊された部分に残されていた可能性も考えられる。

日本本土でも仏教思想が浸透する以前の時代から、火葬に類する葬法があったことが知られている。遺骸を葬送する過程において、皮膚や筋肉と言った軟部組織が残った状態の遺体や白骨化した人骨を火で焼くもので「焼人骨」として検出されている。特に、長野県を始めとした（事例が多い）中部日本においては、縄文から弥生時代まで時代と葬法の変化にもかかわらず連綿と実例がある。これらは再葬における遺骸処理法として行われ、「焼人骨葬」と呼ばれて注目されている（石川1988）。

また、火を利用しなくとも日本本土の縄文・弥生時代における再葬の事例は多く、古くは縄文早期中葉から確認される。このような事例には、1～数体の人骨を集めた少人数集骨葬、多くの人骨を集めた多人数集骨葬、特殊な集積状態である盤状集骨葬等があり、その数は80遺跡にも及ぶとされる（設楽1993）。

岩立遺跡でも、焼けた人骨が一定量確認されている。また、焼けてない人骨を含め、ほとんどの人骨は解剖学的に正位置を保たず集骨状態で確認されている。このことから、人骨群の大半は再葬された一群と考えられる。

巨視的に見るならば日本本土の事例と共通する要素を導き出せるが、本稿は共通性を強調したいわけではない。このような縄文・弥生時代における地域的、時間的な葬墓制の多様性に着目すれば、南西諸島の岩立遺跡というひとつの遺跡においても、葬法は画一的なものではなく、バラエティー豊富なものであった可能性が考えられるのである。

7. 今後の課題

岩立遺跡について、現段階でさらに推定しておきたい事項について触れる。一次葬の場所と、葬法の種類や変化、一連の人骨の安置方法、についてである。

7-1 一次葬の場所

本遺跡からわずかではあるが、解剖学的に正位置を保つと考えられる人骨が検出されている。第4検出面のユニット4で確認された「貝輪着装人骨」や第5検出面ユニット1で確認された「2号人骨」がそれに該当する。このことは、一次葬がこの岩陰で行われていたことを示唆していると思われ、報告者の検討（中村・木下1979）どおりである。だとすれば、葬送儀礼に関わる一次葬から再葬までの一連の行為はこの岩陰を中心としてその周辺で行われていたと推定できそうである。少なくとも乾燥骨の状態のまま安置されている一群に関しては、一次葬から再葬までの行為が岩陰であったことが想定される。新しい遺体を追葬する際に、すでに白骨化した遺体を整理したのかもしれない。

ただし、「2号人骨」が検出された第5検出面は第1～4検出面とはビーチロックの使用や副葬品の使用等で対照的な状況であると報告されているため、「2号人骨」については一次葬で完結し再葬への意識がなかった可能性もある。

7-2 葬法の種類と変化

次に、葬法の種類と変化について、岩立遺跡西区においては人骨層の下部が集骨状態で、上部が一次葬状態で検出されており、時期的な葬法の推移があったことが指摘されている（沖縄国際大学考古学研究室1993a）。岩立遺跡ではこのような推移が逆となっており、H-6グリッドの下部（第5検

出面)においては単葬の「2号人骨」が検出され、上部(第1～4検出面)においては人骨群が集骨状態で検出されている。また、副葬品等その他の検出状況も異なるとされる。

焼けた人骨が注目されているのは岩立遺跡であり、岩立遺跡西区では報告されていない。

このように、岩立遺跡と岩立遺跡西区では異なった豊富な葬法が確認されるが、両者の関係については現時点では検討を進めることが困難である。本遺跡に見られる葬法の相異が時間的変化の中で起こっているのか、同時期における豊富なバリエーションとして整理できるのかについて、今後の課題としておきたい。そのために、両者の時期とその関係について、人骨の年代測定や系統関係の把握等の研究を進めることで集団の性格をより明確にし、さらに、人骨の検出状況や副葬品等の比較を行って検討を重ねていきたい。

7-3 墓の性格

最後に、遺体の安置方法から墓の性格について考えてみる。はたして、死後まもない遺体や再葬されたと考えられる人骨は埋葬(土中に埋めること)されていたのだろうか。岩立遺跡の発掘調査では明確な掘りかたを持つ土壌は確認されていない。これは、砂丘という立地のため確認しづらかったとも考えられるが、全て確認できなかったとは考えがたい。それならば、遺体や人骨は埋葬せずに岩陰付近に露出させたと考えることも可能である。例えば「貝輪着装人骨」は解剖学的に正位置を保つものが腕のみ確認されただけのため、他の部位は崩れて散乱してしまった可能性がある。また、比較的まとまっていた「2号人骨」も下顎骨が外れている等、やや崩れた状態である。他の集骨された人骨についても、「1号人骨」を除き崩れた状態である。このことは、遺体や人骨を砂中に埋葬もしくは土盛りせずに露出させていたことの結果ではないだろうか。遺体を常に露出した環境におき、新しく死者が出た場合はすでに白骨化した遺体を整理・再葬して空間を確保して岩陰に追葬していく。近世・近代の岩陰墓に見られる葬法と似たものを感じる。

これについては、同様の岩陰遺跡をさらに検討してみなければならぬため、今は推量に留め今後の課題としておく。しかし、現在の沖縄人と先史時代人との系統関係や文化が異なろうとも、南西諸島という日本本土とは立地や気候が異なる風土そのものによって、現在沖縄で一般的に知られている風葬の初源的なものが、具志川島という小さな島で確認された岩立遺跡の葬法によって見ることはできるのではないだろうか。

先史時代の南西諸島において火葬に類する葬法が「習慣的」にあったのかについて、なお疑問が残り、今後さらに注意して焼けた人骨の再整理を進めて行きたい。

第1期岩立遺跡発掘調査出土人骨の再整理を行った。焼けた人骨の存在に着目し、推定個体数を求めたことで既存の報告書の内容をさらに深めて支援することができたと思う。具志川島遺跡群は南西諸島における先史時代の様相を深く理解するための遺跡としては第一級の遺跡と考えられる。この遺跡を評価するためにはさらに検討を重ねる必要がある。最終的には現在進行中の発掘調査成果とこれまでの成果をまとめることで、岩立遺跡・岩立遺跡西区の十分な評価をしていきたい。

【謝 辞】

本稿で再整理が可能となったのも、安里嗣淳氏を中心とした諸先輩達の精密な発掘調査の記録があったからである。人骨は1点1点丁寧な記録と伴に取り上げてあり、再変換が可能であった。また、木下尚子氏・中村愿氏の埋葬習俗にかんする報告は十分な検討が行われており、遺跡を理解するための情報が綿密に記されていた。再整理によって新しい事実を付加することができたが、葬墓制に関する

検討になんら変更の余地がなかった。調査課長の岸本義彦氏には過去の岩立遺跡西区の調査に関して多くの情報をいただいた。この発掘調査に携わった多くの方々の努力に感謝致します。

この他、本稿の執筆にあたって茂原信生（京都大学）、篠田謙一（国立科学博物館人類研究部）、米田穰（東京大学大学院新領域創成科学研究科）、山田康弘（島根大学法文学部考古学研究室）、西銘章（嘉手納高校教諭）の諸先生方に多くの御教授を賜った。末筆ではありますが、記して感謝致します。

※ 再整理に利用した人骨は沖縄県立埋蔵文化財センターで保管している。

（かたぎり ちあき：調査課 専門員）
（こばしがわ たけし：調査課 嘱託員）
（しまぶくろ りえこ：宜野座村教育委員会）
（どい なおみ：琉球大学医学部）

【引用・参考文献】

- 石川日出志 1988 「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』第 74 号 駿台史学会
- 池田次郎 1981 「4. 出土火葬骨について」『太安萬侶墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 43 冊 奈良県
橿原考古学研究所編
- 伊是名村教育委員会 1977 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第 1 集
- 伊是名村教育委員会 1978 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第 2 集
- 伊是名村教育委員会 1979 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第 3 集
- 伊是名村教育委員会 1981 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第 6 集
- 伊是名村教育委員会 1993 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第 9 集
- 沖縄県地域史協議会 1998 『シンポジウム 南東の墓ー沖縄の葬制・墓制ー』沖縄出版
- 沖縄国際大学考古学研究室 1993 a 「第 4 章第 1 節岩立遺跡西区」『具志川島遺跡群』伊是名村文化財 調査報
告書第 9 集 伊是名村教育委員会
- 沖縄国際大学考古学研究室 1993 b 「第 4 章第 2 節岩立遺跡群西地点」『具志川島遺跡群』伊是名村文 化財調
査報告書第 9 集 伊是名村教育委員会
- 岸本義彦・片桐千亜紀 2006 「伊是名村具志川島岩立遺跡西区発掘調査の成果概要」『南島考古だより』第 79
号 沖縄考古学会
- 木下尚子・中村愿 1979 「Ⅲ埋葬習俗の検討」『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第 3 集 伊是名村
教育委員会
- Knussman R1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1,Stuttgart,Gustav Fischer Verlag.
- 設楽博己 1993 「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 49 集
- 新里貴之 2004 「南西諸島における先史時代ばせいの集成」『島嶼地域の諸相』東南アジア考古学会
- 高宮廣衛 1966 「貝塚時代の伊是名」『伊是名村誌』伊是名村
- 多和田真淳 1960 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」『1960 年版文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
- 馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 「第一編 根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『霊山根 古屋遺
跡の研究』福島県霊山町教育委員会
- Buikstra,J.E1973 Technique and interpretation in the study of a complex cremation site. In "The Perrins Ledge
Crematory" by J.E. Buikstra and L. Goldtein. pp. Illinois State Museum.
- Baby,R.S1954 Hopewell Cremation Practices. Papers in Archaeology, No.1. The Ohio Historical Society.
Buikstra1973 より引用
- Herrmann,B1977 On histological investigations of cremated human remains. Journal of Human Evolution,



図版3 具志川島遠景
島北岸の海洋より (2006 年撮影)



図版4 具志川島北岸
(2006 年撮影)



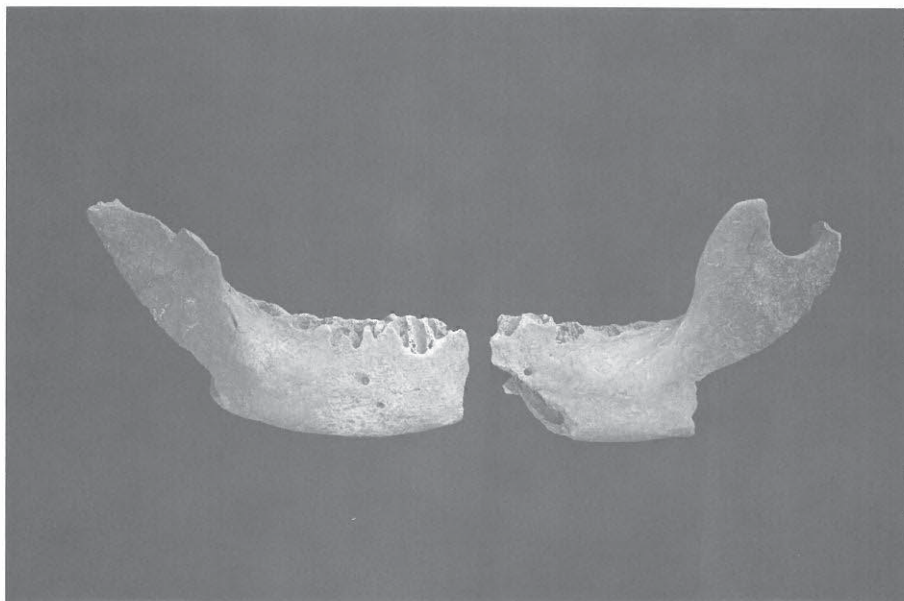
図版5 現在の岩立遺跡
樹木に鬱蒼と覆われている。
(2006 年撮影)



図版6 岩立遺跡近景 第1期具志川島遺跡群発掘調査 第3次調査前（1978年撮影）
（沖縄県立埋蔵文化財センター蔵）



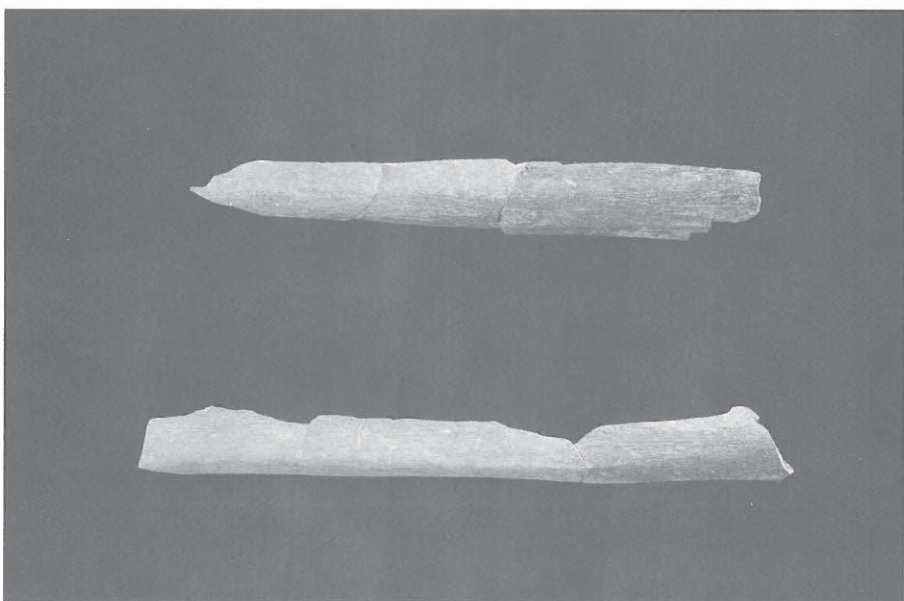
図版7 岩立遺跡人骨検出状況
第1期具志川島遺跡群発掘調査
第3次調査中（1978年）
（沖縄県立埋蔵文化財センター蔵）



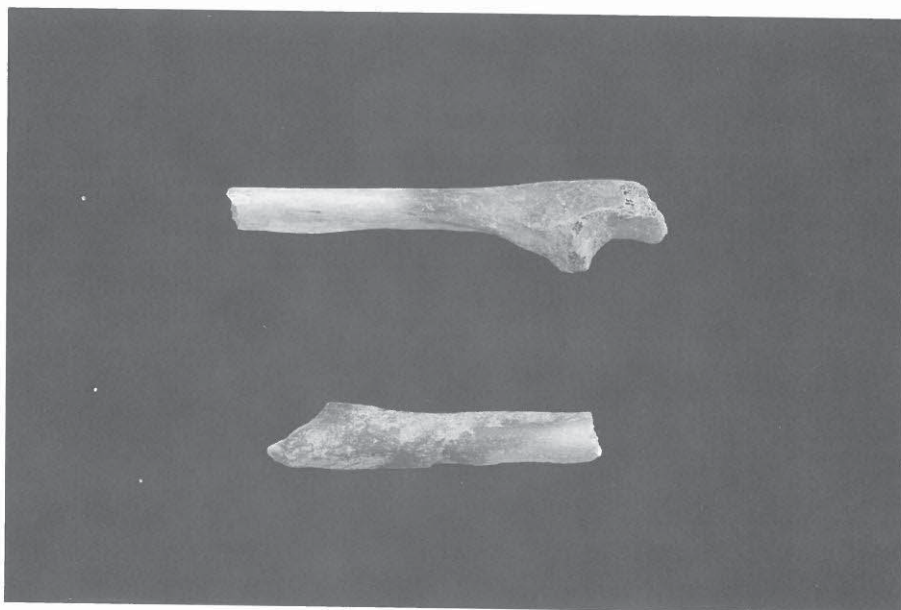
図版8 焼骨1
下顎骨



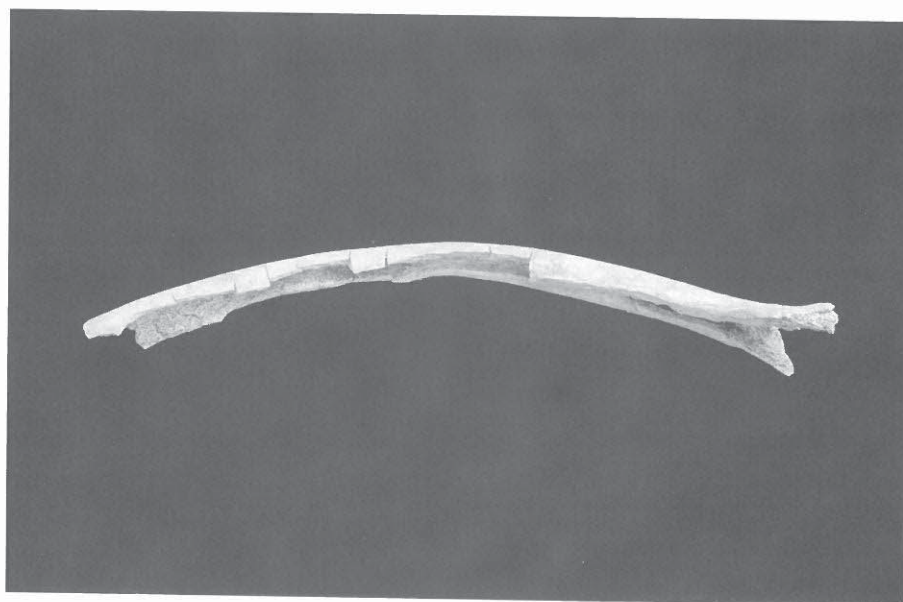
図版9 焼骨2
下顎骨・尺骨・上腕骨（未成人）



図版10 焼骨3
脛骨



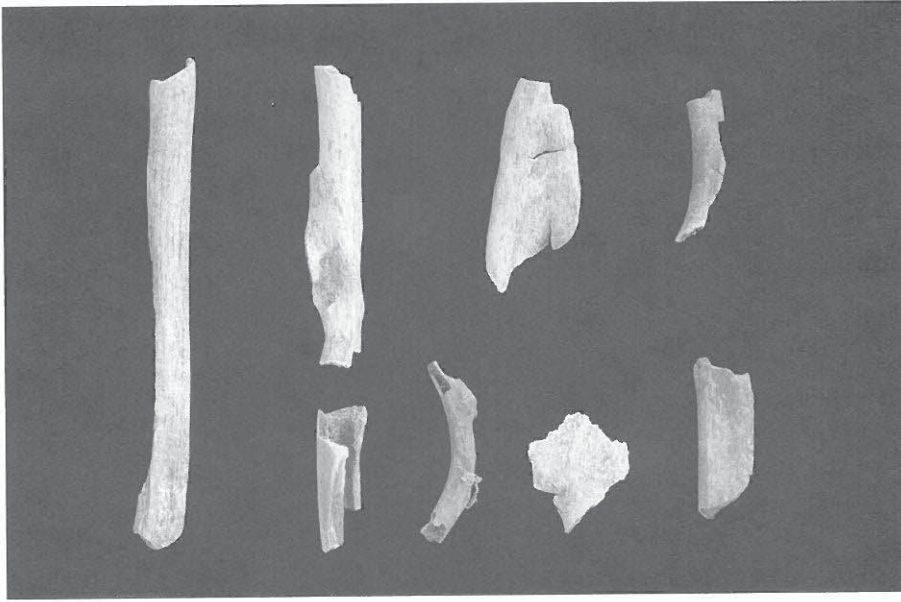
图版 11 烧骨 4
尺骨・脛骨



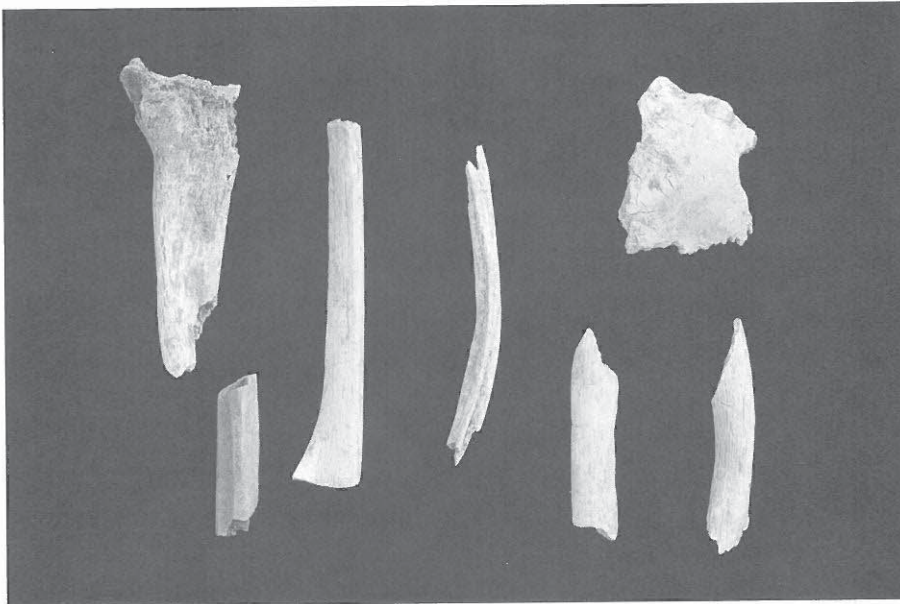
图版 12 火葬骨 1
大腿骨



图版 13 火葬骨 2
大腿骨・脛骨・腓骨・距骨・寛骨・
肋骨 等



図版 14 火葬骨 3
頭骨・大腿骨・脛骨 等



図版 15 火葬骨 4
頭骨・脛骨・腓骨 等



図版 16 火葬骨 5
頭骨・下顎骨・肋骨・椎骨・寛骨・
大腿骨 等